

「なぜだ！ 俺たちがなにをしたと
いうのか！」

絶望感とすべてが打ちひしがれた
現実にもやり場のない怒りを覚えた。
今まで経験したことがない地震で
家が潰された。それも慣れ親しんだ
裏山からの土砂ですべてを失った。
自分だけではない。周りの家も同じ
ように土砂に潰され、跡形もなく瓦
礫の山になってすべてを失った。

6代前に南部藩から林田の祖先は
この蝦夷の地、イフツにやってきた。
この地に住む多くも南部藩を含め東
北諸藩からの移住者が多かった。苦
労が絶えない開拓地ではあったが、
今では食の生産基地として確立して
いた。

そして、まさか裏山が崩れ、身内
が巻き添えになるなどは想像もし
たことはなかった。

子供のころはその山で虫取りや鬼
ごっこ、秋になると親の手伝いとし
て山菜採りを手伝わされた。冬には
板に乗り、急な斜面から雪上を滑り
下りて遊んだ。これらは林田にとつ
て無邪気だったころの思い出だった
が、すべての記憶をかき消すかのよ
うに裏庭の山が牙を向いて住民に襲
うことになった。

子どものころに聞いた祖父の話に
よると、この裏山と少し離れた北の
山では樹木の種類が違うので不思議

に感じていたという。

南部藩の名代として
蝦夷開拓と防人として
やってきた林田勘三郎
と妻のつると米農家そ
して、よろず屋として
活躍する南部藩からの
60名は遠回りをして日
本海側を通り蝦夷を目
指した。

北前船は最終目的の地
のトフマコマフ（現在の
の苦小牧）を目指す
途中、箱崎（現在の函
館）に寄ることになっ
た。箱崎は林田にとつ
て北のオロシヤ国から
の防衛最前線である
が、妻のつるとは全くお気楽であった。

「旦那さま、蝦夷は南部と違います
ね」

「はい。建物、通り、空気、見るも
のすべてが違います」

二人が箱崎に到着した時点で幕府
はこの地を貿易港として開港してい
た。

本来であれば日本人と外国人を隔
てる長崎の出島のような仕組みを考
えていたが、それ以前に交易が進ん
でいたので、箱崎の町はお互いの住
民が混在するかたちになった。

第3話 蝦夷を望む

Vol.132



宮井 能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作物する。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子ども時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョシディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

Illustration by Kazushige Akita

箱崎港にはオロシヤ、イ

ギリス、アメリカの外国船
をはじめ、北前船や地元
の漁船など大きさの違いはあ
れ、規律正しく停留してい
た。

「旦那さま、今日の宿は決
まっていますか」

「いや、これからだ」

「では中町にしましょう」

「しかし他の者が……」

林田たちは地元民から港
の近くよりも少し離れた中
町の方が豊かな外国人が住

オレにも 言わせる!

北海道長沼発 ヒール・ミヤイの憎まれ口通信

み、異国情緒あふれていることを聞いたので、好奇心が強い妻のつるは中町を望んだのだ。しかし、一緒に来た60名はどうするか悩んだ。仕方ないので皆は港に泊まってもらい、自分たちは当時蝦夷を治めていた松前藩から招きを受けたことにした。

泊まった宿の表構えは南部にあるものと同じ和風だったが、一歩踏み入れると、今まで見たことがない飾り付けがされた洋風館だった。

「この飾り付けはエゲレスから運んだものです」

宿の主人がそう説明したが林田は職人が作ったのであろう細工が入った家具、人が座るのであろう椅子、畳くらしいの大きさで食卓代わりになる机に興味を持ったが、その気持ちを決して声に出すことはなかった。

夕食はイカ、松前漬け、ご飯は南部と同じ白米だが、周りに緑色の模様が描かれた白い皿の上に乗せられたものがあつた。

「この『フ』のようなものはなんですか」

女中は答える。
「あちらでは『ぶれっど』と呼んでいるものです。隣にある『ばたー』を塗ってお召し上がり下さい」

「ぶれっど……ばたー……」

林田は初めて目にする『ブレット』と『バター』には食指が動くことは

なかった。

理由は簡単だ。食べ方が分からないので、南部藩士として恥をかきたくないから。しかし妻のつるは違った。つるは皿からぶれっどをひとつ取り、小さな皿に載ったばたーを箸でひとつまみ、ぶれっどに塗った。一口食べてみた。口の中では今までに味わったことのない風味が広がった。

「あら、美味しいわね」と言ったが林田は相変わらず口をへの字に曲げたままだった。

翌朝は日が昇るころに宿を出たトフマコマフ行きの船が出るまで少し時間があつたので遠回りして港に向かった。

二人でレンガ作りの町中を歩いた。

「昨晚見た景色とまた違いますね」「そうか」と林田はいぶかしく答えた。

「あつ、あれは」
つるは男女で歩く見慣れぬ風貌の人を指さした。

異人の男性は股から筒状に二つに分かれた服を着ていた。

異人の女性の姿にも驚いた。さらびやかな服の腰の周りは小さくなり胸からは外側に広がり、その下も足元に向かって広がっていた。「きれいな色あいですね。あの人が

ちはどこから来たのでしょうか。もしかして昨晚見た大きな船は異人のものですか」

「説明した。」「彼らは紅毛人と呼ばれる者です。多くは英吉利(エゲレス、イギリス)や亜米利加(アメリカ)、なかにはオロシアからも来ています」

林田は驚いた。南部藩から蝦夷の開拓と防人を託されたが、すでに異人が住み、交易のみならず箱崎の住民と生活の基盤を作っていたからだ。

北前船は昼前には箱崎を離れ最終目的地のトフマコマフを目指した。船が箱崎を離れるときにつるは「また訪れてみたいですね」と言ったが、林田は相変わらず黙ったままだった。

箱崎で見たものは想像していた緊張感のある蝦夷とは違っていたからだ。それにつるの異人を見て心躍る姿に理解ができないのだ。船上でひとりになったときに、蝦夷にきた本来の目的を決して忘れまい、と心に誓った。

海流の関係で到着が遅れ、船に2泊することになり、到着はまだ寒風にさらされた4月の早朝になった。到着したトフマコマフでは先発隊として南部藩の3名が彼らを待ち受け

ていた。彼ら3名は前年の秋からの地にやって来て、冬の天候調査や目ぼしき入植地の下見をしていた。

到着したトフマコマフには数百軒の街並みがあり、多くは漁業と北前船との交易に従事していた。

しかし箱崎と比較すると明らかに目新しいものもなければ、街の人々の服装は見すばらしかった。

つるの感想は「寂しい街並みですね」だった。

妻のつるはその風景に落胆したが、林田は違っていた。与えられた開拓の使命にさらびやかな服も街並みも必要ないと考えていたからだ。

南部藩先発隊から「しばらくはこちらで泊まっていたいただきます」と伝えられる。

つるは街並みが寂しくても、楽しみにしていたことがあつた。一緒に来た南部藩の60名は3つの宿に分かれて泊まることになった。林田とつるは宿に着くとすぐに食事をするようになった。

鯿、ホッキ貝、麦飯が出された。女中から「お口に合いますか」と聞かれた。

黙って食べている林田の方を見てから、つるは思い切つて女中に聞いてみた。

「ぶれっど、ばたーはないのですか」(つづく)